

---

## おわりにかえて

本巻の編さん事業には北海道教育大学の根本ゼミの学生も参加しています。演習において4期の学生らが参加したことになります。本文冊の執筆者の名前に元教育大生があるのは、卒論を活用しているからです。ただし。特に重要なと思われた農業と漁業について、及び難しいテーマについては専門の先生方にお願いをしました。

ここで紹介するのは、最後の学年で再度各町内会に補足調査で入った際に持ち帰った学生の感想です。

◇中の川地区と北電との関係は良好であると感じました。お互いの利害が一致しているという点もあります。建設時には、住民が船等で手伝うこともありました。また、北電も日頃から町の人たちとコミュニケーションをとるようにしているのです。それは会社として地域の人たちと関わりをもつことをすすめていることからも伺えます。お祭りの時にはお祝いが一番先に届く姿が聞き取りから見えました。

(作左部春菜)

◇平成に入って約20年間、知内町では火力発電所による経済の安定など、プラスの側面の裏に、高齢化や農業の衰退などが起こっているのも事実です。しかし、町民のまちに対する満足度が高いことが森越地区のみではなく、知内町の強みになるのではないかと感じました。

(中村祐美)

◇渡島知内地区の住民は、文化事業への活発な参加を通して、住民たちの娯楽や生涯学習といった観点での生活の質は向上しています。公民館や文化センターでの活動を通して得たつながりをどのように地域に還元し、生かしていくのかが今後の課題です。(星川渓)

◇総合して、平成に入ってからの重内地区は、ニラのブランド化に成功した世代から若者層へ

と世代交代が起こりつつあり、そのうえで現在の組織や行事をたやさないように交流が行われています。(星川渓)

◇元町地区が知内町の行政の中心だった時代を生きていた人々は、お友達や近所の方との交流を楽しんでいる。昭和時代に荒神社や姥杉社などで遊んでいた頃の名残があるように感じ、現在の元町に住むお年寄りの方々の仲の良さは、子どもの頃からつながっているものだと分かりました。以前と比べて子どもの数は減少していますが、見守り隊などで子どもとお年寄りの交流を増やし、次世代にわたっても元町地区の「仲の良さ」を受け継いでほしいと、住民の方々は望んでいます。(齋藤明日香)

◇今後も町内会誕生の当時から続く団結力で、知内町の中心地域という状態を維持していくい、と思っている人も多いです。知内町内の地区の中で現代的な建物が増え、人口も増加傾向にあるきらく地区は、高齢化や人口減少が進む地区が多い中で、まちの活性化が期待できる地域だと言えます。(齋藤明日香)

◇前浜地区の敦沢良子さんのご近所のお友だちがやってきて、敦沢さんと絶え間なく楽しそうに話しかけました。その話を耳を傾けてみると、日常生活で困ったことについて相談したり、近所の○○さんの顔を最近見ないのだけれど大丈夫なのかしらというようなご近所さんの話など、他愛もない会話の中にも他者を気遣ったりする話をしていました。このように、前浜地区は、お互いの家を訪れ情報交換をすることのできる環境ができあがっているのです。(大川ありさ)

◇はまなす地区は、他の地区に比べたら、地区としての歴史がまだ浅いです。現在では高齢化が進み思うように活動が活発化しなかったりすることもあります。辛い過去をもしながらも短い期間の中ではまなす地区の歴史を着実に積み

上げてきました。これからは、より町内会の交流が活発になるように、特に若者が率先して町内会を盛り上げていってほしいです。

(大川ありさ)

◇高齢化が進む地区ではありますが、その現状をしっかりと受けとめ対策を行っているのです。

涌元谷地地区の住民が元気なのは、今の生活に満足しているからであろう。少子高齢化という現実を見るだけではなく、町民の一人ひとりが活発に活動しています。(村上蘭)

◇町内会行事では子どもたちを大切にし、お年寄りへの事業も積極的に行っている。少子高齢化が進んでいる今の時代だからこそ、子どもとお年寄りがうまく共存しあい、助け合っているのです。そんな涌元地区では、抱えている問題をしっかりと理解しつつも前向きに楽しみながら生きていく町民の姿を目にすることができました。(村上蘭)

◇地域をしり、地域特性を生かしながらコミュニケーションの創造をはかっていくことは、まちとして大きな意味を持ちます。そしてそれはまちを誇り、まちの力になります。上雷地区の住民同士の繋がりや支えあいを見ることができました。そしてその延長に、農業で発展を遂げた上雷の、まちとしての力を見ることができたように思います。上雷地区では、まちとしての動きが地域住民の意識にしっかりと影響を与えていました。(佐柄美有)

◇地域全体で子どもたちを育て、地域の産業を大切にし、地元の要望に応えていくという、自分たちの住む湯の里地区を大切にする気持ちがどの方々からお話を伺っても感じられました。このような自分たちの住む地域を大切にする気持ちは地域コミュニティを創っていく上で大事だと考えます。(古里結美)

◇一部の住民から「小谷石の住民は、内部の繋がりは強いが外部との繋がりは弱い。もっと外部との繋がりをもっていかなければならない。」

という意見を得ました。筆者自身も、住民間の関係性は良好であるが、地区外の人々あるいは町外の人々との関係性はどうであろうかという疑問を抱いていました。将来的に、外部との関わりが現在よりも重要になると考えました。(佐々木駿祐)

学生の感想は、もうひとつの活動である湯ノ里小学校の児童との交流で得た感想と似ています。それは都会とは違った純朴なやさしさに対する共感かもしれません。実は、この知内町での住民の良さは、現在の学生の良さと類似しているような感想をもちました。しかしながら、住民へのやさしいまなざしと同時に、学生の調査に対するシビアな問題意識が欠けていることも事実です。このことは、住民にとっても同じことが言えるのかもしれません。

住民が持つ、知内町に対する愛着と満足度は高いものがあります。でも、その愛すべき町が限界集落の危機にあることも事実として受け止めなくてはならないのです。私たちが、これからまちづくりを進めていく時、このような地域や住民の限界や可能性を考えながらどこへ向かうのか大切な選択を迫られています。

基本となる現在の問いは、「本当に豊かなのか」です。そして、この現在における問いを考える際にこの答えを見い出すには、それ以前の時間軸を意識することが大切です。その具体的な事例は、「周知のように、破局は 2011 年に突然に訪れたのではなく、地震列島日本に原発を建設するという致命的誤りはすでに 1960 年代に犯されていた。」(栗田禎子『歴史学のアクチュアリティ』2013) という原発の評価は別としても、歴史的因果関係はこのような時間の連続性の中で見出せます。

私は、高度経済成長期のつくりあげた社会が現在への影響を強く残していると思っています。それは、都市型の経済成長社会です。その社会は、

いろいろな局面での分断された社会です。生産者と消費者、学校と地域社会、地域の中の人間関係や家族関係などがその事例です。このような社会の変化の中で、現在問題になっているのが、都市的地域における持続可能な地域社会づくりに対する、非都市的地域における負のスパイラルによる非持続可能な地域社会の出現です。したがって基本となる政策課題は、「消滅」を回避する「存続」です。非都市的地域の現状をみると「存続」はたやすい政策課題ではありません（小島聰『フィールドから考える地域環境持続可能な地域社会をめざして』2012）。

本書は、これらの地域課題に応えるための町史ではありませんが、その問い合わせ柱は提示しています。「自立した地方自治」、「持続可能な地域社会」、「主体的な地域コミュニティ」、「希望がもてる「開かれた学校」」とは何なのか、などの問い合わせです。これらの問い合わせを総合的に考え、実践していく際に、知内町における「豊かさ」の再定義ができるので はないかと期待しています。

最後に、今回の作業の中で、幾度となく卒論を読んでは修正し、また読んでは修正しを繰り返しました。最後に解ったことがあります。この作業が学生との対話だったということです。

これ程までに卒論を介して対話をしていることに気づかされました。しかしながら、学生の意図を私がどれだけ汲み取っているかは自信がありません。

この経験がまちづくりにおける大切なことも教えてくれました。脇本哲也元町長の言葉の中で好きなのが「生活者による自治」です。行政が町民との協働を意識してから大分時間が経過しました。行政サイドからみれば、「町民は行政依存から抜け出せないでいる」と思われることがあるかもしれません。町民からすれば、「ちょっと上から目線だよね」と行政に不信感をもたれることがあるかもしれません。Q&A のようなスタイルではない、時間をかけた「対話」が必要な時代だと学生から教えられました。町民の主体的な対話の連続性の中から「生活者の自治」を創りあげてほしいと願っています。

最後の最後です。本町史を編さんするのに多くの町民の方々のご協力がありました。すべての氏名を記載していませんがお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。皆さんのお言葉を大切にしたつもりですが、十分に活用できないところは私の力の無さだと反省とお詫びをしておきたいと思います。

編集長 根本直樹